「拓魂」

埼玉県深谷市・櫛挽ヶ原開拓

埼玉県北部の深谷市は、ネギ、ダイコンなどの野菜、花き、肉用牛生産で農業算出額が県内１位。利根川と荒川に挟まれ、北は群馬県と接する。南西部の櫛挽（くしびき）地区は、戦後開拓事業により切り開かれた。

開拓地の櫛挽ヶ原は約５００㌶に及び、大方は平地林（原野）が占めていた。くぼ地が多く、一帯の野水が停滞する悪条件の地形だった。また、１～２年毎の旱魃（かんばつ）で水不足になる、農耕には向かない土地だった。

１９４６（昭和 21）年に入植が始まり、翌年末までに総計２４２戸の県下最大の開拓地となった。冬は、北風（赤城おろし）が吹きつけるため、防風林にする部分は木を残し、開墾を進めた。たまり水を排除するため、荒川への排水路の開さくを第一とした。

48 年に設立された「櫛挽ヶ原開拓農協」は、82 年に「櫛挽農協」に名称変更。90 年には深谷市農協に統合し、現在、ふかや農協櫛挽支店となっている。その敷地内に開拓記念碑がある。櫛挽ヶ原開拓農協が入植 30 周年を記念して 76 年に建立したもので、碑銘は「拓魂」。

碑文は、入植時からの苦労が詳細に記されている。49 年に荒川放水路が完成したものの、農業用水は雨水に頼った。碑文には「然し次々と襲ってくる霜害、雹害、旱魃等の天災が容赦なく発生して収穫に減少をきたし、意気全く銷沈し前途に希望を失い離農する者もあったが、同志相互苦難の中に受け継いで開拓精神を発揮し、手を携えてきた」とある。

特に旱魃が課題だったが、ようやく 60 年に全地域に導水できる施設が完成し、営農の基礎が確立された。

今日では、平行に走る防風林に守られ、整然と区画割りされた農地で営農が展開されている。

拓魂
埼玉県知事 畑和書

拓魂